姑と嫁について

与謝野晶子

青空文庫

或会社の技師をしている工学士某氏の妻が自分に対する苛酷かこくを極めた処置に堪えかねて姑を刺したという故殺未遂犯が近頃公判に附せられたので、その事件の真相が諸新聞に現れた。嫁が姑を刃傷にんじょうしたということは稀有な事件である。無教育な階級の婦人間においてさえ類例を見出しがたいことであるのに、工学士の妻として多少の教育もあり、女優として立とうと決心していたほど新代の芸術に対する渴仰かつじょうもある婦人が、こういう惨事を引起すに至つたについては何か特別な理由がなくてはならない。私は諸新聞の態度が初めから一概に被告を憎んで掛らずに、力めて細かに事件の眞実を伝えようとし、その結果『東京朝日』記者のように特に被告に対して同情のある報道をされたことを、被告と同じ女性の一人として感謝する者である。

新聞紙の伝うる所に由れば、姑という人は明治以前の思想をそのままに墨守して移ることを知らず、現代の教育を受けた若い嫁の心理に大した同感もなく、かえつて断えず反感を持つて対し、二言目には家風を楯たてに取り、自分の旧式な思想を無上の權威として嫁の個性を蹂躪じゅうりんし圧倒することを何とも思わず、聞き苦しい干涉と邪推と、悪罵あくばと、あてこすりとを以て嫁を苛めて悔いぬような、世にいう姑根性をかなり多く備えた婦人であるら

しい。私は幼い時から私の郷里などにそういう無智な姑の少くない事を見聞しており、また一般に温厚な嫁ほどそういう姑の下にあつて人の知らない多大の苦痛を忍んでいることを知つていたので、姑に対する新聞紙の報道を誇張だとは思わない。

また妻という人は新聞紙に由れば普通の教育もあり、常識もあり、良人おとことの仲も睦まじく、所帯持も好く、快濶かいかつではないが優しい中に熱烈な所のある婦人で、芸術上の希望を満たしたために女優として立つに至つたのも良人との相談の上であつて、夫婦の間に決してそれが突飛な問題でもお転婆な行為でもなかつたのである。これは今日の女子教育の程度から見て工学士の妻として恥はずかしからぬ婦人であることは誰も同意するであろう。普通ならば学士の妻となつたことに甘んじて尋常な一生を送る若い婦人が多い世の中に、更に物議の多い女優となつて新しい芸術に何ほどの貢献をしようとする熱心と勇氣を思うと、むしろ多数の学士の妻の中にあつて得やすからぬ健気けんげな婦人の一人であるといつてもよい。

若い夫婦は良人の任地である横浜に住み、老父母たちは神戸に住んでいたが、姑はおりおり夫婦の家に来て滞在しながら良人の留守に嫁に小言をいい、良人に対しても嫁について讒訴ざんそとも見るべきことを言うのであつた。それについて若い妻は日本の一般の女性が姑

に捧げる限りのあらゆる忍従の態度を取つて、少しもそれに反抗する言動を示さなかつた。新旧思想の過渡期に生れたあわれな若い妻は、姑の無情非理を知りつつ出来るだけ忍従の態度を取る外に賢い孝養の法がなかつた。

ここに私の遺憾に思うのは——むしろ攻撃したく思うのは——その良人たる工学士某氏の思慮の足りないことである。なぜに一人前の教育ある紳士がその母の旧思想を説破し、その苛酷な干渉を諫止して、夫婦間の生活は専ら夫婦の間で決すべきものであることを宣明しなかつたのであろう。母を尊敬し併せて妻を愛重する文明男子がこの際取るべき手段は、誠意ある諫諍を敢てして、母を時代錯誤から救い出し、現代に適した賢い母たり新しい母たらしめる外にはないか。子としても良人としても確かなかつ周到な思慮を欠いて甚だ煮え切らぬ態度を取つていたために、母の恥を世に曝し、妻を罪人たらしめ、自分自身を不幸に導くような悲惨な結果になつてしまった。私は良人たる人さえ首鼠両端でなかつたら、この悲劇の運命は多分避け得られたのではないかと思つて返すがえすも惜まれるのである。

さて嫁が姑を刺すという悲劇の突発した時には姑が夫婦の家に滞在していた。それは良人の不同意にかかわらず家風に合わぬ嫁は姑の権威で離縁させるといつてその離縁を実行

するためにわざわざ神戸から出掛けて来たのであった。そして良人の留守に姑は散々の悪態を吐いて乱暴にも肺を病んでいる嫁をいびり出そうとした。恐ろしい権幕で今から直ぐに出て行けといい放った。今日まで如何なる難題にも、邪推にも、悪罵にも、あてこすりにも十二分に堪えていた温良な嫁も、むぎむぎ良人との愛を割かれるこの不法と苛酷に対して、思わず自制の箍を逸してかつと逆上した。たとい嫁の血族に精神病の系統のあることが後に公判廷で立証されたにしても、姑の不法な言いがかりが専擅苛酷な夫婦の離別に及ばなかつたならなおこの逆上はしなかつたであろう。またあるいは無情な離別を強いられたにしても、嫁の体質が平生の生理状態であつたなら恐らくなおこの逆上はしなかつたであろう。しかし不幸にも若い嫁は病身である上に月経時であつた。逆上すると同時に偶ま手近にあつた刃物を取つて姑に投げ附けた。積極的に斬ろうとするのでなく、勿論殺意があるのでなく、手当り次第に投げ附けた。それは猛烈なヒステリーの発作であつた。姑は微かなかすり疵を負つて逃げ出した。こうして意外な悲劇が突発し、嫁が姑を刺したという稀有な故殺未遂犯が成り立つた。

ヒステリーは今日までの所、多数の婦人の或時期（月経時、妊娠時、分娩後、子宮病時）や或境遇（久しい間の独身、異常な災厄）に伴う共通の発作症である。それに強烈なものと

微弱なのとあり、また遺伝から来るのと特発するのとあるが、それが或事を誘因として遽にわかに迫つて来る時には、人は意識の統一を失つて自分で自分が制し切れなくなるものである。私は自身に精神病者の血を引いているし、父が卒中で斃たおれたほどの大酒家であつたので、自然に病的な素質を持つていて、或時期に往往はげしいヒステリーに襲われることがあるから、その若い妻が逆上して刃物を投げ附けたという心理を十分に想像することが出来るのである。投げた物が偶たまま刃物であつたために大それた刃傷沙汰になつたが、ヒステリーの不可抗力に襲われたその時の気分は、何でもいから手当り次第に投げ散して鬱うつせ積きした心の蒸汽を狂的に洩もらさずにはいられないのである。そしてその不可抗力に襲われて無茶苦茶なことをしてしまつた後の甚はなはだしい悔恨と不快さはこれを経験しない人に到底理解の出来そうにないことである。意識の自制を失つた際とはいへ、姑に刃物を投げ附けて負傷させたような結果を作つたのであるから、その瞬時の後に自己に返つた若い妻が教育ある婦人だけにその悔恨が心を嚙かんだことも異常であつたに違いない。法廷において被告が誠心誠意懺悔ざんげの涙に咽むせんだというのは同情されることである。

その動機に情状の酌量すべき所があつても、その事実が法文に触れているのであるから犯罪人として処刑されるのはやむをえない。殊に在来の道徳や習慣をその不用な部分まで

も背景にしている日本の法律では、嫁が姑を刺したという表面の大それた事実を重く見るので情状酌量の余地がない。それでこの犯罪は八年の懲役に処せられ、執行猶予の沙汰もなかつたが、宣告の際に物優しい判事は獄則を恪守して刑期の半を過したなら仮出獄の恩典に浴することも出来るということを告げたということである。私はこの刑罰の裁量が妥当であるかどうかを知らない。とにかくこうして某工学士一家の傷ましい悲劇は一段落が附こうとしているのである。しかし私はこの事件を切掛にして更にいろいろの感想が胸に浮ぶ。

同じ悲劇の種は、姑と嫁のある日本の家庭の大多数に伏在している。姑が嫁を愛するとうような事は昔の清少納言も珍しい物の中に引いている通りむしろ例外であつて、「あなたは善い姑をお持ちになつてお任せです」と嫁の友人から祝を述べるほどのことである。固より姑根性には種々あつて某工学士の母の実際はどうであるか知らないが、最も極端な例に引かれる残忍な姑さえ決して世間に珍しくはないのであるから、それ以外の、あるいは悪性、あるいは不良な程度の姑は無数に散在している。官吏や被傭人となつて他郷に生活している若夫婦の中には父母と別居している者が多く、それらは直接に姑の

干渉を受けないであろうが、しかし某工学士夫婦のように横浜と神戸とに別居してす
 ら前述のような惨事を引起したのであるから、如何に遠く離れて住んでいても聡明な愛情
 を欠いた姑に対する嫁の氣兼苦勞きがねは多少にかかわらず附帯しているのである。まして姑と
 一所に定住している大多数の嫁がそれらの姑の下にあるいは干渉され、あるいは苛められ、
 あるいは意地悪く一分だめしいちぶに精神的に虐殺されつつあるのは言うまでもない。

私は自分の息子むすこのように嫁を愛し、あるいは蔭に廻つて嫁を弁護するほどの美質を持つ
 た理想的の姑が甚だ稀まれに世にあることを認めるが、それは勿論尊敬すべき姑である。しか
 しいわゆる姑根性を脱しない大多数の姑たちについて、私は一概に憎悪のみを以て対しよ
 うとは思わない。これは私が姑という者を持たない境遇にいて、姑に対する氣兼苦勞の実
 感を経験しないからでもあるが、私は憎悪の外に気の毒など思う感が附随している。な
 ぜなら彼らの大多数の姑たちは一方には教えられざる婦人であり、一方には老後の索寞さくぼく、
 月経閉鎖期前後の悲哀、その他種種の事情から精神の平衡を欠き、もしくはヒステリー症
 に罹かかっている婦人だからである。

数年前に私は老人教育の必要であることを述べた。日本の教育という意味が青年教育ば
 かりに偏しているので、青年の思想はどしどし前へ進んで行くのに、老人は一度若い時に

教育されたきりであるからその思想は過去のままだに乾^{ひから}干びている。社会の要部が老人と青年とで成立つものである以上、老人と青年との意志が疏通^{そつう}しなければ社会は順調に進歩しない訳である。年齢の差などがあつて少しは疏通しにくい部分があるのは免れないにしても、青年と共に現代の思想に浸ることを怠^{おこた}りさえしなければ、すべての老人が青年の思想を大部分理解することが出来て、同じ基調の上に呼応し協力して人生の音楽が合奏されるに到るであろう。しかるに日本の老人の多数は私のこの理想と全く背馳^{はいち}している。殊に老婦人の階級はその若い時に教育らしい教育も受けていない人が多く、男子側の老人でさえ内外の新書に親^{したし}むことは稀^{まれ}なのであるから、それらの老婦人たちが現代について精神的に何物も教えられていないのは言うまでもない。それで過去の思想に停滞している老婦人は万事を過去の標準では非し、若い嫁のする事が凡^{すべ}て気に入らない所から、一一それに世話を焼きたくなる。世話や忠告の程度に留つていればよいが、親切が過ぎては干渉となり、^{おまけ}加之に在来の姑と嫁とは殆ど専制時代の君臣の関係であることが正しいとせられているから、干渉が一転すれば強制となり威圧とならずには置かない。

それに老婦人の中には早く良人に別れたり、また良人があつても愛情が亡くなつていたりして心寂しい生活を送っている人がある。そういう婦人は子供の愛だけがせめての慰安

であり生活の力であったのに、子供に嫁が出来れば嫁は子供に対する愛の競争者である。そして結婚以後の子供の心理が母に対して幾分疎縁そえんになるのも、またそれについて母が孤独の寂しさと嫁に対する一種の嫉妬とを感じるのも自然の人情であらうと想われる。

また月経閉鎖期前後の婦人の心理というものがヒステリイ的かかにいろいろの症状を呈するのは顕著な事実であつて、そういう症状に罹かかつた老婦人は嫁のする事なら針ほどの事も憎くなつたり、嫁が好意でした事も反対に僻ひがんで解釈したり、酒アルコール精中毒者が杯を放さないように、またしてはあくどく嫁よめいび苛いびりをして嫁の苦痛を楽まずにはいられないのである。そういう老婦人は子供を多く生まないようにという口実の下に、しばしば若夫婦と室を同じくして臥ふし閨けいぼう房を監視する残忍をさえ敢てするということである。

こういう種種の理由の下に悪性になり、不良になつている多数の姑根性ここんせいというものを私は一概に憎むことが出来ない。たとい姑根性は憎んでも、こういう後天的理由で畸人きじん化され病人化された姑その人はむしろ気の毒に感ぜられる。

読書欲の全く欠けている多数の老婦人たちが今更他の勧めに従つて無為の時間を多少でも新書の研究に善用しようとは考えられない。しかし老婦人たちを在来の姑根性から脱し

て明るく快濶な性情の人と改造するには現代の思想を何かの方法で理解させることが必要である。若い男女を教育する設備はいくらかもあるが、専ら老婦人を教育する会合はまだ何処にも起つていない。老婦人の多く集る諸種の会合はあつても、それは凡て物見遊山の変形で、老婦人同志の奢侈と自慢の競進場たるに過ぎない。多数の老婦人が寺院や教会へ集ることがあつても、既成宗教は最早彼らに現代を教える場所ではない。僧侶や牧師は非現代的な迷信の鼓吹者であり、そして最も彼ら老婦人に受のよい僧侶や牧師は一種の幫間に墮落している。そしてそれらの老婦人の多数は寺院を嫁の悪口の交換所とし、嫁に食べさせる物を吝んで蓄めた金を寄附して、早晩滅亡する運命を持つている両本願寺のような迷信の府を愚かにも支持しようとするに過ぎない。

私は何とかして老婦人の思想を現代的に近づける方法を識者に工夫して欲しい。もし現代の思想に対し少しずつでも理解が出来たら、多数の老婦人は嫁苛りに心を勞するような時代遅れの生活に甘んじまい。欧米の老婦人たちが若い婦人と協力して諸種の社会事業や婦人問題に努力するように、日本の老婦人も何かの有用な事業に活動しようとするかも知れない。活動は人を若返らせる回春薬の最上の物である。そうなれば境遇から得た孤独の悲哀や、僻みや、老婦人の生理的变化から得た病的心理なども大に減少され緩和されるで

あろう。

しかしこれは私の空想かも知れない。政界に元老という物があつて、精神も體質も変兆を来^{きた}しながら、老人の親切から政府当局者の施設に干渉してかえつて国民を迷惑からせている。そして元老の頭というものは到底国民の自由思想と一致する見込のないものである。家庭における現在の姑と若夫婦との思想も元老と国民とのそのように全く相容^{あい}れないものかも知れない。

現在の姑たちについて私の考は右のように希望と悲観と半^{なかば}しているが、しかし未来の姑については全く新しい紀元の開かれることを期待している。今日の教育ある若い妻はその程度に差があつても、概して幾分づつか皆新しい妻である。私は出来るだけ自治独立の生活を送ろうとして共^に、他の自治独立の生活をも尊重したいと思つている。結婚して一家を営むに至つた我子夫婦は既に分封した自治独立の一団であるから、私は全然その生活に干渉したくない。在来の父母舅姑は我子夫婦から財養し孝養されることを望んだのであるが、私は我子が独立し得るまでの教育にはあくまでも力を竭^{つく}す覚悟でいる代りに、我子からその報償を得ようとは毛頭考えていない。まだ私は家系、家風などという物も少

しも尊重すべき物と思つていないのであるから、子供らが何処へ行つて自治の生活を始めてもそれを祝福する外に何の註文もない。独立するに至つた我子には絶対に干渉しないつもりであるから親の名を以て威圧がましいことをしないのは勿論である。私は今から幼い子供たちに各自の意見を親の前で大胆に述べる習慣を附けている。それは私と子供たちとの思想が他日相反する時があつても互に気兼ねきかねせずに研究し合つて理解することの出来るようにと思ふからである。夫婦、親子、朋友ほうゆうの愛も初めの中は感情一偏の愛であるが、少し年齢が長たけて行つた後に誠実と知性との理解が伴わない愛は危い。感情と知性と誠実がすつきり透き徹とおるように融とけ合えば夫婦親子は勿論、我子の嫁とも一切の他人とも愛し得られるものであらうと私は思つている。既に新しい妻である私は他日こういう思想の上に立つて新しい姑ともなるつもりである。しかし我子夫婦に対するこういう意味の生活は最早母と子、姑と嫁という関係でなくて、年齢の違つた一種特別の親友という関係に近いであらう。親友の間には威圧も、屈従も、僻ひみも、排はい擠せいもない。そして世には思想の合つた親友も相反した親友もあり得る。また快濶な競争の上に成立つ親友もあり得る。私は命の限り、はた天分の尽きない限り、他人とするように我子夫婦とも愛と誠実と思想との快濶な競争を続けたいと考えている。(一九一五年八月)

(『太陽』一九一五年九月)

青空文庫情報

底本：「与謝野晶子評論集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年8月16日初版発行

1994（平成6年）年6月6日10刷発行

底本の親本：「人及び女として」天弦堂書房

1916（大正5）年4月初版発行

初出：「太陽」

1915（大正4）年9月

入力：Mana ohbe

校正：門田裕志

2002年1月10日公開

2012年9月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

姑と嫁について

与謝野晶子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>